

## 「暴動」をいかにとらえるか —南アジアにおける集合的暴力論の理論的展開—

木村 真希子  
(国際平和研究所助手)

### はじめに

1980年代半ばより、南アジアにおける集合的暴力論は質・量ともに飛躍的に発展を遂げた。この背景には、1980年代から90年代にかけて、インド・スリランカの都市部における大規模暴動や、インドのヒンドゥー右派勢力の台頭によるアヨーディア事件<sup>(1)</sup>とその影響を受けた暴動の広まりに研究者たちが触発されたことがある。とくに、1983年のスリランカの首都コロomboで起きた反タミル人暴動<sup>(2)</sup>、および1984年のインドの首都デリーで起きた反シク暴動<sup>(3)</sup>は、両国の研究者に大きな衝撃を与えた。また、その後ヒンドゥー右派政党であるインド人民党 (Bharatiya Janata Party, 略称 BJP) の進出と、それにとまなう反ムスリム暴動の頻発は、インドにおける政治と暴力との関係の再考を迫った。

また、1997年はインド独立50周年であったが、これにとまないインド・パキスタン分離独立時の大規模暴動の見直しの機運も高まり、特に歴史学の分野で暴動に関する研究が進んだ。このように、1980年代後半から南アジアでは政治学、歴史学、社会学、文化人類学などの社会科学系領域において集合的暴力に関する研究が盛んであり、暴動論や群集論に新たな視点を付け加えている。

こうした中、「コミューナル暴動」と植民地主義の関係が問い直された。サバルタン・スタディーの代表的論者であるギャーネンドラ・パーンデーによれば、南アジアにおける「暴動」の記述は植

民地官僚に端を発するが、こうした記述の中では「土着民」は常に「原始的な他者」として位置づけられ、暴力はその「他者」の過去に付随するものとして表象された。こうした「土着民」による暴力は「宗教」「ファナティシズム」「無知」と結び付けられ、西洋近代による啓蒙主義とは対照的なものと捉えられた。植民地インドにおける暴動は啓蒙主義的教育の欠如の帰結と捉えられ、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒は暴力的な共同体と見られ、文明化されるべき対象とみなされたのである<sup>(4)</sup>。こうした言説が、西洋近代による文明化の使命と、植民地化の正当化を支えたという側面を見逃してはならないだろう。

また、暴動と政治、特に政党政治の関係を再考する視点も登場した。現代インドにおいて、多くの暴動が選挙をきっかけに起きることはさまざまな論者によって指摘されているが、ポール・ブラスらアメリカ政治学の論者は、ブラスの「制度化された暴動システム」に代表されるように、政党や大規模組織の関与による暴動の「生産」を前提とした議論を展開した<sup>(5)</sup>。こうした議論は、暴動が原初的な民族及び宗教対立に端を発するという原初主義的な暴動論を克服したという点で大きな評価を与えられるだろう。一方、政党による操作を強調するあまり、暴動に参加する主体が「無知な群集」もしくは「犯罪者集団 (goonda)」として描かれる傾向にあり、大規模暴動における「普通の人びと」の参加の側面や、その際の民衆

のエージェンシーといった問題を過小評価している点も指摘できる。

これらの議論では、「暴動」や「コミュニナリズム」といった概念そのものの見直しも迫られている。現在まで、政治学や社会学において、「暴動」は自然発生的な集合的爆発行動であり、しばしば目的や合理性を持たない群集による逸脱行動とみなされがちである。しかし、近年のいわゆる「暴動」と呼ばれているものを分析すれば、上記の理念型に当てはまらない事例も多く、「暴動」や「群集」概念の再考も迫られている。また、こうした社会科学の理論そのものに含まれる偏見やステレオタイプの問題もあり、近年の研究では「暴動」に変わって「集合的暴力」という概念を用いるようになってきている。

本稿では、南アジアにおける文化人類学、社会学、政治学、歴史学などの代表的著作のレビューを行うと同時に、集合的暴力に関する理論的發展をまとめるとともに今後の課題を提示する。

## 1. 南アジアにおける集合的暴力論再考のきっかけ：コロombo暴動とデリー暴動研究

南アジアにおける社会学と文化人類学の分野において、集合的暴力論が盛んになるのは1980年代半ば以降である。それまでは、政治学や歴史学で暴動やコミュニナリズムに関する研究が散見されたが、社会学や文化人類学においては限られた研究しか存在しない<sup>(6)</sup>。

この傾向を変えたのが、1983年にスリランカの首都コロomboで起きた反タミル人暴動と、1984年にデリーの首都で起きた反シク暴動である。両国の首都で発生し、3,000人以上の死者を出したといわれる暴動は、「大規模な暴動は過去のものである」という人びとの暴動観を覆し、これ以降、現在にいたるまで、南アジアでは集合的暴力に関する研究が一定の分野を確立した。ここでは、コロombo暴動とデリー暴動に関する代表的研究を紹

介する。

まず1987年に、ウマ・チャクラバルティとナンディタ・ハクサルが *Delhi Riots: Three Days in the Life of a Nation* を発表した。ウマ・チャクラバルティはジェンダー研究で有名な、デリー大学の歴史学教授であり、ナンディタ・ハクサルはその教え子で、現在は弁護士として人権活動に取り組んでいる。二人の著作は反シク暴動時の主に被害者を対象としたインタビュー集であり、「デリー暴動の経験が将来の歴史家に伝わるように」との意図でテープ録音され、書き起こされた。序文で著者は、「歴史家の仲介を経ない、普通の人びとの経験と視点が提示されることの必要」を感じ、そのために単なる研究書でなく、インタビュー集を刊行することを選んだと述べている<sup>(7)</sup>。

続いて、1990年にデリー大学の社会学教授だったビーナ・ダス編著の *Mirrors of Violence: Communities, Riots and Survivors in South Asia* が出版された。歴史学、文化人類学、心理学などの論者が集まったセミナーの原稿をもとにしたこの論文集は、その後の暴動研究に大きな影響を与えた。編者のビーナ・ダスはデリー暴動の被害者の地区で、夫を亡くしたシク教徒の女性やその他の家族に対する救援活動に従事しながら、データを収集した。その影響もあり、論文集の最後の3章は生存者の語りに重点を置いた構成となっている。ダスは自身の論文の中で、生存者の経験を記録に残すことは、「苦しみ (suffering) が救いに変化する可能性をわれわれに示すため、特に重要である」と記している<sup>(8)</sup>。

一方、スリランカのコロombo暴動に関しては、1996年にスタンレー・タンバイアが *Leveling Crowds: Ethnonationalist Conflict and Collective Violence in South Asia* を発表する。タンバイアはハーバード大学の文化人類学教授であり、コロombo暴動を経験したことによりこの問題に取り組み始める。前半は1983年のコロombo暴動を含む4

つの植民地期および現代南アジア（スリランカ、インド、パキスタン）の暴動の事例研究であり、後半は集合的暴力に関する理論的考察、特に暴動のルーチン化や「群集」論、そしてモラル・エコノミーに関する論考で構成されている<sup>(9)</sup>。

同年、バレンタイン・ダニエルが *Charred Lullabies: Chapters in an Anthropography of Violence* を刊行した。スリランカ出身であり、アメリカの大学で文化人類学を専攻した著者は、博士論文のテーマであるタミル女性のフォーク・ソングの収集のため一時帰国中、コロombo暴動を経験し、テーマの変更を余儀なくされた。著者はいかにして暴力の「ボルノグラフィ」に陥ることなく、暴力のエスノグラフィもしくはアンソロポグラフィを描くことができるのかという試みに挑戦する<sup>(10)</sup>。

上記のデリー暴動およびコロombo暴動の4作に共通するのは、暴動を「自らの身近で起こったもの、もしくは起きうるもの」ととらえ、誰でもが被害者（そして時には加害者）になりうるという視点であろう。特にデリー暴動についての著作は、著者が被害者の救援作業に関わったり、裁判に協力しながらインタビューを行うなど、研究者および知識人の役割を積極的に再解釈しようとした。こうした研究と実践とをつなげようとする姿勢から、被害者の「痛み(pain)」や「苦しみ(suffering)」をどのように社会科学的研究の中で表現できるのかという方法論に取り組んだことは、この分野の研究のひとつの大きな成果である。また、同時に暴動に関する研究の上で、「語り」や記憶をどう解釈するのかという問題意識群につながり、その後の暴動研究に大きな影響を及ぼした<sup>(11)</sup>。

## 2. 「コミユナル暴動」と植民地主義の関係

おもに社会学者や文化人類学者が現代的な暴動の問題を扱う一方で、歴史学者の間では植民地時代および分離独立時の暴動、特に「(ヒンドゥー・ムスリム間の) コミュナル暴動」を扱う研究が盛

んになった<sup>(12)</sup>。こうした研究は植民地時代や分離独立時の暴動に関して豊富なデータを提供したことはもちろんだが、それ以上に「コミユナリズム」や「暴動」といった概念の再考を迫ったという点が特筆に価する<sup>(13)</sup>。特にこの問題に正面から取り組んだギャーネンドラ・パーンデーのいくつかの論考は興味深い。

インドにおいて、「コミユナリズム」が植民地主義の産物であるという指摘は新しいものではない。イギリスからの独立を目指す民族主義独立運動家は、1920年代から30年代に高まったヒンドゥー・ムスリム教徒の間の宗派对立を独立運動の脅威とみなし、一部のエリートによる操作の産物と批判した。こうした立場は、独立以降の歴史家にも受け継がれた。

パーンデーは「コミユナリズム」は植民地主義者の知の一つの形態 (a form of colonialist knowledge) であると指摘する。そもそも、「宗教共同体同士の対立」という意味での「コミユナリズム」の使われ方はインドの文脈に特有なものであり、これは「他者」の生活と政治をとらえるためのオリエンタリスト的な使用方法である。こうしたコミユナリズム概念は植民地行政官がインド社会を捉える際に適用したことは言うまでもないが、パーンデーによれば、こうした「コミユナリズム」概念の強調は植民地行政官にとどまらず、独立運動を指導した民族主義者 (nationalist) にも共通していたという。以下、パーンデーの議論を引用する<sup>(14)</sup>。

彼によれば、植民地主義者のコミユナリズム理解はインドを「異常」ととらえ、宗派主義をインド社会の本質的な病理であると定義づけた。コミユナリズムは、アフリカにおける「部族主義」と同様に現地社会に特有の生得的特質とされた。また、そうした捉え方は植民地化された社会の人びとのエージェンシーを否定するものでもあった。

このように、植民地主義者のコミユナリズム理解はインドの歴史に由来するものであり、インド

の人びとの固有の性格に根ざすという本質主義的理解が一般であった一方、民族主義者にとってコミュニズムとはより近年の起源を持つものであり、経済のおよび政治的不平等と紛争から生じるものであり、一部のエリート（植民地主義者および）の利益追求のために作り出されるものであった。

植民地主義者が本質主義的立場を取ったことに対し、民族主義者は経済（および政治）主義的解釈を取り、両者の見解は一見対立的であるかのように見える<sup>(15)</sup>。しかし、パーンデーによれば、こうした違いにも関わらず、両者はコミュニズム理解に関して重要な点を共有しているという。それは、「コミュニズム」とは西欧近代と対置されるものであり、合理主義やセキュラリズムとまったくべらるな価値への転換を迫られるものであるという理解である<sup>(16)</sup>。こうしたコミュニズム理解は、「コミューナル暴動」の記述においてより顕著に見られる。パーンデーは、イギリスの植民地主義は「土着民」を「原始的な他者」として位置づけ、暴力をその歴史に根ざすものとして位置づけた、と指摘する。

上記のような植民地主義的な「暴動」の理解は、初期の群集論と呼応する。パニックや暴動、革命的運動の主体を「群集」と位置づけるアプローチでは、こうした行動を大規模な社会変動ともなう社会的秩序の崩壊ととらえ、群集による集合行動を「逸脱」と捉えた<sup>(17)</sup>。

こうした一連の理解がある一方で、ある種の暴力を社会的変動に欠かせない必然的なものと捉えるマルクス主義的な理解も存在する。18世紀から19世紀のヨーロッパやアメリカの社会史においてこうした理解は顕著である。サンドリア・フライターグはイギリスやフランスにおける社会史の影響を色濃く受け<sup>(18)</sup>、集合的暴力を含む集合的行動の新しい歴史解釈を試み、これらは合理的な行為であると提示した。同時に、群集行動は歴史的

変化のダイナミクスに周辺的な出来事ではなく、むしろ核心にあると指摘した<sup>(19)</sup>。

南アジアでは、こうしたマルクス主義的な社会史の影響を受けた研究として、すでに1980年代前半から「サバルタン・スタディーズ」グループによる一連の研究が積み重ねられてきていた。しかし、こうした伝統のある南アジア研究においても、暴動、特にコミューナル暴動はこうした説明枠組みとのずれが感じられる。コミューナル暴動においては、周辺化されたものが権力者に対して反乱を起こすという図式ではなく、貧者が貧者を襲うという構造が見られたためである。この問題については、暴動参加者のエージェンシーにも絡む問題なので、後半の章で検討したい。

### 3. 暴動と政党政治の関係

一方、1980年代後半から1990年代には、アヨーディヤ事件に代表されるような、ヒンドゥー至上主義を掲げるインド人民党（Bharatiya Janata Party、以下BJP）の台頭と政党や大組織による暴動の政治的な利用により、「政治の道具」としての暴動の側面に注目が集まった。主にアメリカ政治学の間で盛んとなったこうしたアプローチでは、プラスのいう「制度化された暴動システム」のように、政党や大規模組織による暴動への関与や、ある決まった都市・州においておきるルーティン化された暴動を主な分析の対象とした。

プラスは1997年に出版された *Theft of an Idol*<sup>(20)</sup> の中で、ウツタル・プラデーシュ州のいくつかの事例を中心に、県単位の地方都市における暴動を取り巻く地方の政治や警察のあり方を描く。フォーロー流に暴動を「テキスト」として読み解いたあと、政治学的に「誰が犯人であったか」を分析するという理論的矛盾はあるものの、インドの地方都市において暴動に警察や地方の政治化がどのように関与し、暴動の発生や防止のファクターとなっているのかという点についての的確に描写した。

ブラスの議論の中心にあるのは、「制度化された暴動システム」という概念で象徴されるように、ある都市の中で、偶発的な小規模な事件を暴動に変えていくインフォーマルなネットワークが存在し、そこに BJP などの政党や RSS などの大規模組織が関与しているという指摘である。この議論はさらに2004年に出版された、ウッタル・プラデッシュ州のアリーガル市の暴動を分析対象とした *The Production of Hindu-Muslim Violence in Contemporary India*<sup>(21)</sup> で発展して紹介される。この著作では、インド政治においてなぜ暴動がなくならないのか、という点を、「それはインドの政治システムの中で暴動が制度的に必要とされているからである」という制度的アプローチを取って説明しようとする。

ブラスによる研究は、ヒンドゥー・ムスリム間のコミューナル暴力を野蛮性や原初主義に帰する従来の暴動理解を克服し、集合的暴力に関する異なる見解を提示したという点で評価できる。フィールドワークに基づいて描かれた地方政治家や警察の暴動への関与を指摘した部分が現場の状況の把握に貢献し、インドの集合的暴力における政治的な含意、特に政党の役割の大きさを伝えるという点では非常に優れた著作であろう。一方で、「制度化された暴動システム」という理論化の部分は一つの仮説として優れてはいるものの、すべての暴動の背景にこうした非公式なネットワークが存在しているかどうかは今後、検討の余地があるだろう。

ブラスの一連の著作と前後して、アシュトシュ・ヴァルシュネイやイアン・ウィルキンソンといった若手の研究者も暴動に関する独自の見解を発表している。両者は1996年に、新聞記事に基づいた暴動に関するデータ・セットを発表する。対象は1960年から1993年におきたヒンドゥー・ムスリム暴動であり、ほとんどの暴動が農村ではなく都市部で起きている<sup>(22)</sup> こと、暴動のおきやすい州・

都市を特定するなど、一定の傾向を提示することには成功している。ただし、新聞を元に集めたデータなので、「ヒンドゥー・ムスリム暴動」をどのように定義するのかについての疑問は残る。また、分析対象の定義上、大規模な暴動はほとんど分析の範囲外であることは指摘しなければならないだろう。分離独立時の一連の暴動にはじまり、「ヒンドゥー・ムスリム」という定義から外れた1984年のデリーにおける反シク暴動および1983年のアッサム州のネリーの虐殺など、2,000人を越える規模の暴動はほとんど対象外である。唯一、1989年にビハール州でおきたバーガルプル暴動は分析対象となっているが、これも死者の数が少なく見積もられている。

二人とも、このデータ・セットの発表後、それぞれ独自の暴動に関する著作を発表している。ヴァルシュネイは2004年に *Ethnic Conflict and Civic Life* の中で、インドの中で暴動のおきやすい都市とそうでない都市を計6都市比較し、ヒンドゥーとムスリムの間に市民的なつながり (civic engagement) が存在する都市では暴動が抑制されるという結論を導き出す<sup>(23)</sup>。

一方、ウィルキンソンは、ブラスとヴァルシュネイが都市レベルの分析を行ったことに対し、州レベルの政党政治のあり方に焦点を当てる。州政権をめぐる票争いの中で、マイノリティ (ムスリム) 票が決定的となる州では政権担当者が暴動の抑止に積極的になり、そうでない州では消極的か、むしろ暴動を扇動するケースもあるという理論を打ち出す<sup>(24)</sup>。こうした「選挙誘引モデル」を、1950年から1995年にかけて新聞記事をもとに集めたデータを利用し、立証することを試みた<sup>(25)</sup>。

ヴァルシュネイやウィルキンソンの議論の土台となるデータ・セットは、計量化や理論化志向の強いアメリカ政治学の傾向が顕著であるといえる。計量化により明らかになった暴動の特徴もあるが、逆にそのために議論に制約が生じた点も指摘でき

よう。計量分析に際しては、どうしても一定の数が必要となるため、小規模な暴動に関するデータを数多く集めて分析する必要がある。もちろん、上記の指摘のようにバーガルプル暴動なども入っているわけだが、やはり定義の関係上、独立後の大規模な暴動が分析から除かれているという限界は指摘できる。

また、ヴァルシュネイとウィルキンソンは、データ・セット発表後の個別の研究ではまったく違う方向に議論を進展させている。しかし、不思議と暴動に関する基本的理解は共有しているように見える。政党やその他の政治的および大規模組織の関与が決定的で、ある決まった都市・州においておきるルーティン化された暴動というインドの「(ヒンドゥー・ムスリム) コミュナル暴動」という一定の見解は共有し、またそのイメージを確立したといえるだろう。これは、プラスともやや似た見解であり、むしろプラスの研究がアメリカ政治学におけるインドの宗教暴動という見方に大きな影響を及ぼしたといえるかも知れない。

こうした暴動観は、先にも述べたように、ヒンドゥー・ムスリムの間の暴力は歴史的対立に基づくものであるという原初主義的なステレオタイプを克服し、暴動における政治のかかわりを強調したという点でいずれも大きな評価を与えられるべき著作である。しかし、政治家や警察による関与の側面を強調しすぎたあまり、暴動とは常にそれらの勢力によって「作り出される」もの(プラスによる production という言葉の使用に見られるように)であり、暴動に参加するものは「グンダー(goonda)」と呼ばれるならず者や犯罪者集団、もしくは政治家によって人形のように操られる「群集」といったイメージを強調しすぎたきらいがある。

しかしながら、過去インドにおいて起きた暴動がすべて、上記のようなタイプに当てはまるわけではない。分離独立時の暴動など、大規模な暴動

でははじめのうちこそ政治家の介入が見られるものの、それが彼らの予想を超えて広まり、警察や軍隊にもコントロールが不可能な状況が見られる。その際、暴動に参加しているのは必ずしも「ならず者」「犯罪者集団」ばかりではなく、いわゆる「普通のひとびと」も関与している。

こうした普通の人びとがどのようにして暴動に参加しているのか、という点は、上記の研究では取りこぼされている点である。また、暴動に参加する人々をどのようにとらえるのか、という視点も欠落している。次節では暴動参加者をとらえる視点について整理してみたい。

#### 4. 暴動参加者のエージェンシー

暴動参加者に関する研究の層の薄さは、政治学に限ったことではない。すでに1990年に *Mirrors of Violence* において、ビーナ・ダスは「暴動参加者に関する経験的知識が不足している」と指摘している。こうしたデータの不足は、しばしば暴動参加者に対するインタビューが極めて困難であるという方法論的な問題に起因している。

ここで、伝統的な「群集」の捉えかたを整理してみよう。第2節で軽く触れたように、ル・ボンやムスコヴィッチに代表される群集心理の議論では、群集を突発的および自然発生的で、感情的な集団であるととらえている。こうした群集は指導者によって動かされる受身の存在であり、無意識の衝動によって行動するという前提であるため、彼らが暴動に参加する理由というのは問題とされない<sup>(26)</sup>。

一方、群集は合理的な理由により集合的行動への参加を選択するという見方も存在する。トンプソンは18世紀の食糧暴動における群集の行動をモラル・エコノミーという概念を使って説明を試みた。彼は伝統的な社会において共同体の構成員のすべてが生存を保障されていたモラル・エコノミーから、近代化が進んで新しい秩序が成立するに当

たり、農民たちは伝統的な権利を求めて暴動に参加したのだと分析する<sup>(27)</sup>。しかし、ビーナ・ダスは南アジアにおける暴動に参加する群集は、多くの場合、トンプソンの描くような合理的な群集という像に当てはまらないと論じる<sup>(28)</sup>。

スペンサーも同様の指摘をしている。トンプソンらによる研究は宗教暴動よりは穀物暴動などの社会革命に重点をおく傾向がある。南アジア研究でこのアプローチをもっとも効果的に展開したのは、ラナジット・グハをはじめとするサバルタン・スタディーズの研究グループであろう。初期のリーダー的存在であったラナジット・グハは、植民地期の農民反乱に焦点を当て、彼らの認識が植民者のそれとは根本的に異なることを指摘した。しかし、スペンサーは、ここでもコミューナル暴動はこの説明枠組みにぴったりとは当てはまらないと指摘する。革命的群集に特徴的なことは、貧者や権力を持たないものが権力に抗するという図式である。しかし、コミューナル暴動では、都市の貧者が互いを攻撃するという図式であり、革命的群集のイメージとは程遠い<sup>(29)</sup>。

同じくサバルタン・スタディーズの代表的論者であり、植民地主義とコミューナル暴動概念の関係について分析したパーンデーは、1989年にビハール州で起きたバーガルプル暴動に関する論考で、1980年代後半の暴動がそれまでとは性質の異なるものであることを指摘する。パーンデーの議論は、1,000人以上の死者を出したバーガルプル暴動について、市民団体の調査に加わって現地を訪問した経験に基づいている。バーガルプル暴動やデリー暴動は、何千、何万もの群集が小さな孤立したマイノリティ集団の住居を攻撃した組織的虐殺に近いものであり、これは路上の小競り合いで人が一人死んだといった突発的イベントとは根本的に性質を異にするものである。また、バーガルプル暴動では、1980年代に顕著になったヒンドゥー世界協会(Vishwa Hindu Parishad、通称 VHP)などの活動

の影響が強く、彼らの暴力的なスローガンや関与する暴動は人びとの心に長期的な影響を残していると分析した<sup>(30)</sup>。

しかし、ここでパーンデーがより強調したことは、暴動を経済的利益や土地闘争、市場経済の浸透、そしてエリートによる操作であるという理解は、暴動における人びとの感情や認識をほとんど省み余地を残さず、人々のエージェンシーを問題としないことである。こうした限界を乗り越えるため、すでに第2節で述べたように、暴動の犠牲者に焦点を当て「痛み」や「苦しみ」をテーマとした研究は試みられてきた<sup>(31)</sup>。しかし、暴動参加者のエージェンシーについての研究は数が非常に限られている。

ベス・ロイは、東パキスタンの農村暴動を事例に、このエージェンシーの問題について非常に興味深い議論を展開する。現在はバングラデシュに位置する、ある農村地域の暴動の事例を通し、ロイは暴動に参加した人々は「合理的に暴動に参加する決定を下した」と結論づける。ムスリム農民の飼っている牛が、隣人のヒンドゥーの農民の敷地内の草を食べたことが発端となったこの事件について、文書化された資料はほとんど存在しない。ロイは村人へのインタビューに完全に頼ることで事件を再構成し、何が村人たちを暴動へと駆り立てたのかを分析する。ロイが強調する点の一つは、この事件において、いわゆる「外部勢力」による介入が(少なくとも村人の語りの中では)登場しないということである。暴動についての分析では、しばしばよそ者が入り込み、「無垢な民衆」を反乱に導いたという図式が語られる。しかし、この事件では、こうした「外部勢力」が問題にならないケースであり、それゆえロイは人びとの意思決定過程に注目しながら分析を進めていく<sup>(32)</sup>。

ロイはサバルタン・スタディーズの研究者たちの依拠したグラムシの議論を参考にしながら、こう論じる。グラムシが指摘するように、文化やア

イディアは支配階級によって支配され、サバルタンの手にはない。しかし、権力を持たないものも、彼／女らの世界を形づくる上で、自らの意思や創造性を発揮する能力がまったくないわけではない。限定された形ではあっても、権力を持たないものが権力を取るために、もしくは権力と交渉するための行為は存在している。こうした行為は制度的枠組みを効果的に挑戦できないという限界はあるかも知れないが、その方法を検証することは、権力を持たない人々がどのような認識で行動をとったのかという点についての理解につながるはずである。

こうした前提の下に、ロイはいわゆる「コミューナル暴動」に参加する人々の行為を説明する仮説として、以下を提示する。「人びとはある特定のドラマを演じることにより、抑圧によって限定され、捻じ曲げられた形ではあるが、権利と権力を再交渉 (renegotiate) する。」そして、こう主張する。彼／女らが闘争に参加する特定の枠組みは、いわば、不均衡な権力関係によって、彼／女らによりよい状態に幸福に向かって進む空間 (space) を限定しているが、しかしその闘争が意味あるものでないとはいえない<sup>(33)</sup>。

このような主張に基づき、ロイは聞き取りから再構成したエスノグラフィにそって、人びとの語りの断片から、分離独立とパキスタンという国家の形成が人びとの日常生活に与えた歴史意識を分析し、なぜこの暴動が「ヒンドゥー・ムスリム」というコミュニカルな対立軸を取ったのかという点を分析する。そして、最後にこう結論付ける。「バングラデシュの村人の経験は、外部者にとっては異質の出来事である。われわれは、彼／女たちの物語を聞くまで、彼／女らの歴史を知ることはできない。」<sup>(34)</sup>

暴動の起きた村で、被害者と加害者のインタビューからエスノグラフィを描き出すロイの議論は、暴動参加者のエージェンシーを考える上で一

つの手がかりとなるものであろう。集合的暴力について、「参与観察」は非常に困難をともなう手法である。しかし、インタビューに基づいて再構成するという形であれば、そうした方法論上の困難さは克服できる。ただし、このとき、インタビューで得られたデータはあくまで「語り」であり、「事実」として扱うことは困難であるという点は注意すべきであろう。この語りをどのように解釈するのかという点が問題になってくる。また、警察や調査委員会の報告書などの文書資料が存在すれば、資料と語りの間のずれを分析することも可能である。こうした、文書資料から確認できる「事実」と、人びとの語りの間のずれを分析することは、植民地行政官によって残された資料を分析する歴史学的手法と異なった新たな知見を提供することができるだろう。

ロイの調査は農村部であったため、暴動というセンシティブなテーマについて聞き取りを行うことが比較的容易であった<sup>(35)</sup>。しかし、彼女の調査の知見は、特に「人びとはある特定のドラマを演じることにより、抑圧によって限定され、捻じ曲げられた形ではあるが、権利と権力を再交渉 (renegotiate) する」という仮説は、都市部における暴動にも当てはまる点はあるだろう。都市部での聞き取りは、いまだに困難な点はあるが、今後の暴動研究において一つの手がかりとなる可能性を秘めている。

#### おわりに

本稿では、1980年代以降のインドおよびスリランカにおける集合的暴力研究の成果と課題を概観した。1980年代前半のインドおよびスリランカの首都における大規模暴動によって活性化した暴動に関する研究は、ダスによる試みに代表されるように、研究者自身が積極的にその後の救援活動に関与することにより、研究者の役割を見直そうとしたという点で非常にユニークな試みであったと



いえよう。こうした姿勢から、特に犠牲者の視点を重視し、「痛み」や「苦しみ」をどのようにして社会学や文化人類学の研究に取り入れられるのか、という方法論が模索された。

一方、暴動と植民地主義の関係の分析は、歴史学の画期的な成果であったといえるだろう。コミューナルな暴力を「他者」に帰属するものとした植民地官僚およびナショナリストの歴史観に関するパーンデーの分析は鋭く、この視点は現代の暴動を分析する際にも、政治学や社会学の研究者によって参考にされるべき知見である。「暴動」概念の再検討も含めて、より広く研究者の間で共有されるべき問題意識ではないだろうか。

また、1980年代後半以降のヒンドゥー右派勢力の台頭と、政党や大規模組織の絡む暴動の頻発から、政党政治と集合的暴力の関係に関する研究成果も出ている。第2節で指摘したように、インドにおいて政治と暴動の関係は必ずしも目新しい視点ではないが、1990年代に顕著なヒンドゥー右派勢力の台頭と、暴動が一部の州において、日常的に政治の道具として使われている状況が明らかになった。

南アジアにおける集合的暴力に関する議論から言えることは、暴動は一見、自然発生的に見えるが、実は暴力の形は権力や、そのときの政治のあり方と密接に結びつくものであるということである。この点、現代南アジアにおける集合的暴力に関する研究の蓄積は、1980年代から多くの知見を積み重ねてきた。同時に、政治への着目は重要だが、それは政治家の関与が暴動を引き起こすという単純な図式が常に成立するということを意味しない。途中から、暴動を扇動した側のコントロールがきかなくなった事例や、当初の意図とは異なる形で暴力が起きる事例も少なくない。こうした暴動を作り出そうとする側と、実際に暴動に参加するものとの間の認識のずれや、いわゆる「外部勢力」の影響が比較的小さいと思われるケースで

の参加者のパースペクティブについては、まだまだ今後、検討の余地のある分野である。今後は、こうした暴動参加者の認識に関して、ていねいに見ていく議論が期待される。

## 註

- (1) 1992年12月6日、伝説の王子ラーマの生誕地とされるウツタル・プラデーシュ州アヨーディアで、ヒンドゥーの暴徒がラーマの寺を立てるためムスリム寺院（バブリー・マスジッド）を攻撃、多数のムスリムを殺傷した事件。なお、アヨーディア事件の影響はインド各地に及んだが、その中で最大規模の事件であったボンベイ暴動（1992年から93年にかけての一連の事件）について日本語で以下の論考がある。竹中千春「暴動の政治過程—1992-93年ボンベイ暴動」日本比較政治学会編『民族共存の条件』早稲田大学出版部、2001年、pp.49-78
- (2) 1983年7月から8月にかけて、スリランカの首都コロンボにおいてマイノリティであるタミル人が多数派のシンハラ人に攻撃され、同様の事件がスリランカ全国に波及し、約2,000-3,000人が犠牲者となった事件。タミル・イーラム解放の虎による軍への攻撃がきっかけとなったといわれているが、暴動の後半ではシンハラ人の政治家による関与が指摘されている。Stanley Tambiah, *Leveling Crowds: Ethnonationalist Conflicts and Collective Violence in South Asia*, California University Press: 1996, pp.94-100.
- (3) 1984年10月31日、当時のインド首相インディラ・ガンジーがシク教徒のボディガードによって暗殺されたことが引き金となって、直後の11月1日から4日まで首都デリーでシク教徒が攻撃され、約3,000-4,000人が犠

犠牲者となった事件。インディラ・ガンジー暗殺の背景には、当時パンジャブ州で盛んであったシク教徒によるカーリスターン独立運動と、その鎮圧のためにシク教総本山黄金寺院が武力制圧されたことが関係している。また、デリー暴動の背景として、当時の政権党であったインド国民会議派の関与が指摘されている。

- (4) Gyanendra Pandey, “The Prose of Otherness” in David Arnold and David Hardiman ed., *Subaltern Studies VIII: Essays in Honour of Ranajit Guha*, Oxford University Press, 1994, pp.195-7.
- (5) Paul R. Brass, *The Production of Hindu-Muslim Violence in Contemporary India*, Oxford University Press, 2003.
- (6) Asghar Ali Engineer は政治学の視点から、比較的早い段階から暴動に関する研究を積み重ねてきている。Asghar Ali Engineer ed., *Communal Riots in Post-Independence India*, Sangam Books, Hyderabad, 1984などを参照のこと。
- (7) Uma Chakravarti and Nandita Haksar, *Delhi Riots: Three days in the life of a Nation*, Lancer International: New Delhi, 1987, pp. 9-11.
- (8) Veena Das ed., *Mirrors of Violence: Communities, Riots and Survivors in South Asia*, Oxford University Press, New Delhi, 1990. Dasはこのほかにもデリー暴動に関する論文を多数発表しているが、1997年から2001年にかけて社会的苦しみ (social suffering) に関する以下の3作の論文集を他の研究者とともに編集した。Arthur Kleinman, Veena Das, and Margaret Lock ed., *Social Suffering*, University of California Press, 1997. Veena Das, Arthur Kleinman, Mamphela Ramphele and Pamela Reynolds ed., *Violence and Subjectivity*, University of California Press, 2000. Veena Das, Arthur Kleinman, Margaret Lock, Mamphela Ramphele and Pamela Reynolds ed., *Remaking a World: Violence, Social Suffering, and Recovery*, University of California Press, 2000
- (9) Stanley J. Tambiah, *Leveling Crowds: Ethnonationalist Conflicts and Collective Violence in South Asia*, University of California Press, 1996.
- (10) E. Valentine Daniel, *Charred Lullabies: Chapters in an Anthropography of Violence*, Princeton University Press, 1996, p.4-5.
- (11) Urvashi Butalia, *The Other Side of Silence: Voices from the Partition of India*, Penguin, 1998. (邦訳書「沈黙の向こう側—インド・パキスタン分離独立と引き裂かれた人々の声」明石書店、2002年)は、分離独立時の暴動に関する著作の最後を記憶に関する議論で締めくくっている。また、歴史と記憶、暴力に関する議論に関しては、Gyanendra Pandey, *Remembering Partition: Violence, Nationalism and History in India*, Cambridge University Press, 2001および Shahid Amin, *Event, Metaphor, Memory: Chauri Chaura 1922-1992*, Oxford University Press, 1995も参照されたい。
- (12) 歴史学における植民地時代や分離独立時の暴動に関する研究は膨大であり、ここでは不十分ながらその一部を紹介する。註(11)で紹介した論考や、以下に参照するパーンデーの一連の著作のほか、註(19)の Sandria Freitag, *Collective Action and Community: Public Arenas and the Emergence of Communalism in North India*, Oxford University Press, Delhi, 1990は暴動と植民地主義を扱っ

- たものとして先駆的な著作である。Suranjan Das, *Communal Riots in Bengal 1905-1947*, Oxford University Press, 1991はベンガル地域における暴動に関する代表的研究である。また、ベンガルに関してはほかに、Patricia A. Gossman, *Riots and Victims: Violence and the Construction of Communal Identity Among Bengali Muslims, 1905-1947*, Westview Press, 1999もある。
- (13) インドにおいて、「コミュニナリズム」が植民地主義の産物であるという指摘自体は新しいものではない。イギリスからの独立を目指す民族主義独立運動家は、1920年代から30年代に高まったヒンドゥ・ムスリム教徒の間の宗派対立を独立運動の脅威とみなし、一部のエリートによる操作の産物と批判した。こうした立場は、独立以降の歴史家にも受け継がれた。Bipan Chandra, *Modern India*, National Council of Educational Research and Training, New Delhi, 1971および Sumit Sarkar, *Modern India, 1885-1947*, Macmillan, 1983を参照。
- (14) Gyanendra Pandey, *The Construction of Communalism in Colonial North India*, Second Edition, Oxford University Press, 1990=2006, pp.6-9.
- (15) ただし、植民地主義者の中にも後者の立場をとるものがある一方、民族主義者の中にもヒンドゥ・ムスリム宗教対立を本質的に捉えるものもあり、両者の区分は必ずしも絶対的ではない。しかし、パーンデーは全般的にこうした傾向は見られると指摘する。
- (16) Pandey 前掲書、pp.9-13.
- (17) Martin Fuchs and Antje Linkenbach, “Social Movements” in Das, Veena (ed.) *The Oxford India Companion to Sociology and Social Anthropology*, Oxford University Press, 2003, pp.1526 - 1531. Jonathan Spencer, “Collective Violence” in Das, Veena (ed.) *The Oxford India Companion to Sociology and Social Anthropology*, Oxford University Press, 2003, pp.1565-1566.
- (18) Freitag 前掲書、pp.4-5, 14.
- (19) 前掲書、pp.14-15.
- (20) Paul R. Brass, *Theft of an Idol: Text and Context in the Representation of Collective Violence*, Seagull, Calcutta, 1997. pp.
- (21) Paul R. Brass, *The Production of Hindu-Muslim Violence in Contemporary India*, Oxford University Press, New Delhi, 2003.
- (22) 暴動による死者の数は1950年から1995年の間、農村部では一貫して3-4%と指摘されている。Ashutosh Varshney, *Ethnic Conflict and Civic Life: Hindus and Muslims in India*, Oxford University Press, New Delhi, 2002
- (23) 前掲書。
- (24) Steven I. Wilkinson, *Votes and Violence: Electoral Competition and Communal Riots in India*, Cambridge University Press, Cambridge, 2004.
- (25) なお、Wilkinsonの前掲書に関しては、佐藤宏による日本語の書評がある。参照されたい。佐藤宏「書評—Steven I. Wilkinson, *Votes and Violence: Electoral Competition and Communal Riots in India*」『アジア経済』2006年、XLVII-2: 77-81.
- (26) Veena Das, *Mirrors of Violence*, pp.25-27.
- (27) E. P. Thompson, “The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century,” *Past and Present*, 1971, p.78.
- (28) Veena Das, *Mirrors of Violence*, pp.27-29
- (29) Spencer 前掲論文、pp.1568-69.
- (30) Gyanendra Pandey, “In Defence of the

Fragment: Writing About Hindu-Muslim Riots in India Today,” in *Representations* (37), Winter 1992, pp.

- (31) 注5のDasによる編著書を参照。また、2007年に以下の本が出版された。Roma Chatterji and Deepak Mehta, *Living with Violence: An Anthropology of Events and Everyday Life*, Routledge, 2007.
- (32) Beth Roy, *Some Trouble with Cows: Making Sense of Social Conflict*, University of California Press, 1996. pp.132-4.
- (33) 前掲書、pp.130-2.
- (34) 前掲書、pp.192-4.
- (35) 農村部における大規模暴動に関する聞き取り調査として、1983年に約1,600-2,000人以上の死者を出したといわれるネリー暴動に関する筆者による論文を挙げておく。Makiko Kimura, “Memories of the Massacre: Violence and Collective Identity in the Narratives on the Nellie Incident” in *Asian Ethnicity*, Vol.4, No.2, 2003.